



TITLE:

減債基金論

AUTHOR(S):

小川, 郷太郎

CITATION:

小川, 郷太郎. 減債基金論. 經濟論叢 1917, 4(2): 211-238

ISSUE DATE:

1917-02-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127160>

RIGHT:

京都帝國大學法學科大學

經濟論叢

第四卷 第二號

大正六年二月一日發行

論說

『一經濟學者ノ第一思想』ヲ讀ム……………	法學博士 河上 肇
官業問題ニ就キテ(三)……………	法學博士 神戶 正雄
體質廢頽問題(三)……………	法學博士 財部 靜治
經濟心理學ノ組織的研究(二)……………	米田 庄太郎
消費ニ關スル學說ノ發達(二)……………	瀧本 誠一

時事問題

減債基金論……………	法學博士 小川 郷太郎
日支經濟關係ノ真相……………	法學博士 戶田 海市
關西商業會議所聯合經濟調查會事業概況……………	法學博士 神戶 正雄

雜錄

經濟雜話(八)……………	法學博士 田島 錦治
中世ニ於ケル賣買ノ擔保……………	文學博士 三浦 周行
不換紙幣ノ價格ニ付テ河上博士ニ答フ……………	法學博士 戶田 海市
米ノ卸賣價格ト小賣價格……………	法學士 河田 嗣郎
植民國トシテノ丁抹ノ末路……………	山本 美越乃

時事問題

減債基金論

小川 郷太郎

緒言

減債基金ハ我政界ニ於ケル暗礁ナリ、曩ニ大隈内閣ハ之カ爲メニ躓キ、今又寺内内閣ハ之カ爲メニ累ハサレントス、若シ今期ノ議會ニ於テ内閣不信任案以外、尙大波瀾ヲ呼ヒ起スモノアリトセハ、ソハ必スヤ減債基金問題タラサルベカラズ、今日ニ於テモ既ニ減債基金ニ關スル議論ハ盛ニ戰ハレツツアリ、或ハ之ヲ全廢セントスルアリ、或ハ之ヲ維持セントスルアリ、議論紛々トシテ歸一スル所ナシ。

蓋シ寺内内閣ヲ組織セル多數ノ人ハ、嘗テ大隈内閣ノ財政策ヲ攻撃シテ餘ス所ナク、殊ニ減債基金ノ減額ヲ批難シ、其復舊ヲ切論シテ已マサリシ也、故ニ大隈大隈内閣ノ豫算ヲ踏襲スルトスルモ、昔日ノ所論ニ顧ミ、減債基金ノ復舊ハ之ヲ實現セサルベカラサルベシ、是ニ於テ寺内内閣ハ財政策トシテ、減債基金ヲ復舊シ、鐵道資金ハ之ヲ公債ニ仰クコトトセル也、然レトモ、コハ

只大正六年度ノ財政策タルノミ、大正七年度以下ニ至リテハ、海軍擴張ノ爲メニ、費スベキ經費ハ次第二巨額ニ上リ、他ニ好個ノ財源モナグレハ、減債基金ニ當ツベキ財源ヲ以テ之ニ充テントスル也、是ニ至テ寺内内閣ノ財政策ハ減債基金ノ復舊ニアリヤ、或ハ減債基金ノ打破ニアリヤ、殆ト得テ解スベカラザルモノアル也、

政府ノ減債基金ニ對スル態度ハ此ノ如ク、明確ナルガ如クニシテ、明確ナラズ、在野ノ論客ニシテ減債基金ヲ論スルモノヲ見ルニ、此制ヲ打破セントスル論モ、必スシモ徹底的ニアラズ、此制ヲ維持セントスル説モ亦、必スシモ論理ヲ貫ケルモノニアラズ、此ノ如クシテ己マスンバ、減債基金制ハ終ニ解決スルノ機ナク長ク我政界ノ暗礁トナリテ殘ラントス、是レ決シテ我國ノ爲ニ慶スベキコトニアラズ、余輩ハ、一日モ早く、此問題ガ解決セラレテ、政界ノ暗礁ノ速ニ除キ去ラレンコトヲ祈ラサルヲ得ス、是ニ於テカ此篇アリ。

第一 減債基金ノ意義

減債基金ヲ論セントセハ、先ツ其意義ヲ明ニセサルベカラズ、目下減債基金ニ關シ議論ヲ上下スルモノヲ見ルニ、其中ニ減債基金ノ意義ニ關シ、見解ヲ異ニスルモノナキニアラズ、是レ斷シテ議論ノ是非ヲ明ニスル所以ニアラズ。

減債基金ノ意義ハ、之ヲ國法ニ求メサルベカラズ、國法トハ他ナシ、國債整理基金特別會計法是ナリ、同法ニ依レハ國債ノ償還ノ爲メニ國債整理基金ヲ置キテ、之ヲ特別會計トシ以テ一般會

計ト獨立セシメ（一條）其基金ニ充ツベキ資ハ毎年一般會計又ハ他ノ特別會計ヨリ繰入ルルコト
トシ、其繰入額ノ中、國債ノ元金償還ニ充ツベキ金額ハ他ノ特別會計ヨリ繰入ルモノヲ併セテ前
年度首ニ於ケル國債總額ノ萬分ノ百十六以上トシ參千萬圓ヲ下ルコトヲ得サルモノトス、（二條）
尤モ政府ハ計算上利益アリト認ムル場合ニ於テ國債借換ノ爲メ低利ノ國債ヲ募集スルコトヲ得、
（五條）其國債借換ニ依ル募集金其他ノ收入金ハ直接ニ之ヲ國債整理基金特別會計ニ編入スベク
（三條）從テ國債整理基金ハ國債ノ發行ニ關スル費途ニモ亦之ヲ使用スルコトヲ得（一條二項）ルコトト
ナレルガ、國債ノ借換、國債ノ發行モ窮極スル所ハ國債ノ負擔ヲ減スルコトヲ目的トスルモノト
云ハサルベカラズ、故ニ減債基金ト云フ。

減債基金ハ公債ヲ減スルコトヲ目的トス、公債ヲ減スルニハ、年々規則正シク公債ノ償還ヲ爲
サザルベカラズ、是ニ於テ國債整理基金特別會計法ハ、年々ノ償還額ハ前年度首ニ於ケル國債總
額ノ萬分ノ百十六以上トシ、參千萬圓ヲ下ルコトヲ得サルモノトセザ、是レ法律ノ強制ニ依ル償
還ナリ、此法律ノ強制ニ依ル償還ヲ爲サンカ爲メニ、特別ノ基金ヲ設ケ、年々他ヨリ一定額ヲ繰
入ルルモノトセル也、蓋シ一般會計ニ於テ、財政ノ都合ニヨリテ公債ノ償還ヲ爲スコトトセバ、事
實上償還ヲ爲サザルコトアルベケレハ也、故ニ我國法ニ依ル減債基金ハ年々一般會計又ハ特別會
計ヨリ一定額ノ資金ヲ繰入レ、之ニ依テ強制的ニ公債ノ償還ヲ爲サントスル特別基金ナリト云フ
コトヲ得ベシ。

減債基金制度ハ、以上述ヘタル如キヲ以テ、第一ニ法律ノ強制ニ依テ公債ヲ償還スルコトヲ特

質トス、減債基金制度ハ此點ニ於テ自由償還制度ト全ク相反ス、自由償還制度トハ國家カ法律又ハ勅令ニ依リテ明示的ニ償還ノ程度ヲ定メズ、財政ノ狀況如何ニヨリテ豫算上其償還ノ程度ヲ決スルヲイフ、自由償還制度ハ、歳入剩餘ヲ以テ償還資金トス、故ニ公債償還ノ爲メニ特別ノ基金ヲ設ケサル也、歳入剩餘アレハ則チ公債ヲ償還シ、歳入剩餘ナケレハ則チ公債ヲ償還セサル也、公債償還ハ、財政ノ狀況如何ニヨリテ變シ、法ノ強制ナシ、是レ自由タル所以也、之ニ反シテ減債基金ハ、年々少クトモ一定額ノ償還ヲ行ハサルベカラズ、歳入剩餘ノ有無、財政ノ狀況如何ヲ問ハサル也、是レ強制償還タル所以也、此強制償還ハ減債基金ノ生命ナリ、強制償還ヲ取リ去レハ、減債基金制ハ精神ニ於テ死スベキ也、サレハ減債基金制度ヲ維持スル以上ハ、如何ナル事變發生スルモ、一定額ノ公債償還ヲ中止スベカラズ、如何ニ重要ナル經費ノ支出セサルベカラス、モノアルモ、一定額ノ公債償還ヲ措テ之ヲ先ニスベカラサル也、減債基金ハ此點ニ於テ膠柱主義也、若シ事變發生セリトテ公債償還ヲ中止シ、重要ナル經費ヲ支辨センカ爲メトテ、公債償還ヲ一時差控フルカ如キハ、是レ膠柱主義ニアラスシテ應變主義也、減債基金制度ノ精神ハ茲ニ失ハレテ、自由償還制度ノ精神ガ表ハレ來ル也、サレハ、膠柱主義ヲ非ナリトスルノ論ハ、減債基金ヲ維持スルノ論トナラズシテ却テ之ヲ廢棄スルノ論トナルベキ也。

減債基金ハ公債ヲ償還スルカ爲メニ設ケラレタル特別ノ基金ナルガ、其基金ニ充ツベキ資金ハ毎年一般會計又ハ他ノ特別會計ヨリ繰入ル、モノ也、此基金ニシテ其年度内ニ使用セサルモノアラハ翌年度ニ繰越スベキハ(八條)論ヲ俟タズト雖トモ、基金ハ積ミ立テルコトヲ趣旨トセズ

故ニ減債基金ハ從テ繰入レラルレハ、從テ償還セラルルヲ普通トス、此點ニ於テ我國現今ノ減債基金ハ歐洲ニ於ケル舊式ノ減債基金ト多少異レル所アリト云ハサルベカラズ。

歐洲ニ於ケル舊式ノ減債基金ハ、年々繰入金ヲ受クルト同時ニ或ル種ノ財源ヲ積立テテ公債ノ償還ニ充テタルモノナリ、其積ミ立テラルベキ財源ニハ種々アレトモ、凡ソ之ヲ三ニ分ツコトヲ得、其一ハ減債基金ニ依リテ買入レラル公債ノ利子ナリ、即チ買入レラル公債ハ償還セラレタルモノト看做サスシテ國庫ヨリ利子ヲ受取り、次年度以下ノ公債買入資金ニ充ツルナリ、其二ハ借換ノ爲ニ節約シタル利子ナリ、即チ借換ニ依テ利子ノ低下ヲ來スモ、國庫ヨリハ從前ノ利子ヲ受取り、次年度以下ノ公債買入資金ニ充ツルモノナリ、其三ハ起債ノ際ニ其手取金ノ中ヨリ割カレタル資金ナリ、即チ新シク公債ヲ起ス毎ニ其手取金ヨリ公債表面價格ノ百分一ヲ積立テテ減債基金ト爲ス如キ是ナリ、歐洲ニ於ケル舊式減債基金ハ悉ク此三種ノ積立金ヲ有セシモノト限ル可カラサレトモ、少クトモ、其一種ヲハ之ヲ有シタリシナリ、殊ニ其第一ノモノヲ以テ然リトス、故ニ學者或ハ減債基金ヲ以テ、「一般會計ヨリ年々定額ノ資金ヲ積立テ、之ヲ運用シテ公債ヲ買入レスク買入レタル公債ニ對シテハ國庫ヨリ定額ノ利子ヲ支拂ヒ、次年度ニハ此利子ト豫定ノ積立金トヲ以テ更ニ公債ヲ買入レ、斯クシテ漸次公債ノ全部ヲ買入レ盡シテ以テ銷却ヲ了セントスルモノナリ」ト云フモノアル也。

此種ノ減債基金ハ、英國ニ於テ一七八六年「Redemption Fund」ニヨリテ創メラレ、其後他ノ國ニモ傳播スルニ至レルモノトス、故ニ又之ヲ「Redemption Fund」式減債基金ト云フ、

此種ノ減債基金ハ、Price 氏ノ考案ニ基ケルモノナリ Price 氏ハ複利ノ元則ヲ根據トシテ、公債ハ自ラ償還スルモノナリトノ論ヲ唱ヘタル也、換言スレハ、公債ヲ買上ゲ、其買上ケタル公債ノ利子ヲ基金トシ進テ已マズンハ、其基金ハ累進的ニ増進シ後年ニ至ルニ從ヒ其額愈々大トナリ、容易ニ元金ヲ買上ケ盡スニ至ルベシト云ヒ、又起債ノ時其百分一ヲ以テ基金トセハ、三分利公債ハ四十七年、四分利公債ハ、四十二年、五分利公債ハ三十七年ヲ以テ償還シ盡スベシト云フ也

Pit 式減債基金ハ此理論ヲ基礎トシ、年々ノ一定繰入金ノ外或ハ買上ケタル公債ノ利子ヲ以テ基金ト爲シ、或ハ起債ノ際ニ於ケル手取金ノ一部分ヲ基金ト爲シ又或ハ借換ノ爲ニ節約セラレタル利子ヲモ基金ト爲シタリシガ、後、一旦買入レタル公債ニ就テハ之ヲ銷却セルモノト看做シ、利子ヲ支拂フコトヲ廢スルモノモ生シタリ、

我國ノ減債基金ハ素ヨリ Pit 式ノ減債基金ニアラズ、一旦買入レタル公債ハ、銷却セルモノト看做シテ、之ニ利子ヲ支拂フコトヲ爲サス、又新シク公債ヲ起スニ際シテモ、其手取金ノ一部ヲ割キ之ヲ積立テテ減債基金ト爲ササリシヲ以テナリ、然レトモ、其初メニ於テハ多少 Pit 式減債基金ノ痕跡ナカリシニアラズ、何ヲ以テ之ヲ云フ、曰ク公債ノ利子支拂并ニ元金償還ニ對シテ年々一定額ヲ繰入ルルコトトセシヲ以テ也、即チ毎年一般會計ヨリ繰入ルルベキ資金中明治三十七八年戰役ニ關スル經費支辨ノ爲ニ發行セル國債及ヒ其借換ノ爲メ發行シタル國債ニ關スル分ハ年額一億一千萬圓ヲ下ルヲ得ズト定メラレタル也、此規定ニヨレハ日露戰爭ニ關シテ起サレタル公債ニ就テハ年々ノ元金償還ノ爲ニ利拂額ガ減スルコトアルモ、又借換ニ依テ利子ノ低下ヲ來スコ

トアルモ、毎年一般會計ヨリ繰入ルベキ總額ハ變セサルカ故ニ、利拂額ノ減少シタル丈并ニ借換ニヨリテ低下シタル利子ノ差額丈ハ元金償還ニ充ツルコトヲ得ヘク、年ヲ追テ元金償還額ハ愈々増シ行クコトトナルベシ、斯クシテ當時ノ爲政家ハ、三十餘年ノ間ニ日露戰爭ノ爲ニ起サレタル公債ヲ償還シ爲サントシタル也、是レ¹⁸⁸⁰式ノ減債基金ノ形式ニハ倣ハサレトモ、精神ニ於テ倣ヘル也、買上ケタル公債ハ償還セラレタルモノトシテ利子ノ支拂ヲ爲サスト雖トモ、一般會計ノ方面ヨリ觀察スレバ、償還セラレザリシトキト同様ノ一定額ヲ支出スレハ也、故ニ¹⁸⁸⁰式ノ減債基金ト明治二十九年來ノ我國ノ減債基金トハ、一旦償還シタル公債ノ利子并ニ借換ニヨリテ節約セル利子ヲ減債基金局ニテ積立ヲ置クト否トニ於テ異ルト云フコトヲ得ベキ也。

然ルニ我國ノ減債基金ハ、其後修正セラレ、日露戰爭ニヨル公債ニ對シ元利支拂ノ爲ニ壹億壹千萬圓ヲ繰入ルルト云フ條項ヲ削リ公債償還ノ割合ヲ前年度首ニ於ケル國債總額ノ萬分ノ百十六以上トスト改メリ、此標準ニヨルトキハ、公債ノ償還セラルルニ從テ後年度ニハ利子支拂額ノ減スルト共ニ、公債償還額モ減シ行クナリ、併シ年々ノ公債償還額ガ餘リニ少クナルハ減債基金ノ精神ヲ貫ク所以ニアラサレハ、法ハ、參千萬圓ヲ下ルコトヲ得ズトナセル也、故ニ減債基金法ヲ制定シタル當時ノ考トハ、大分ニ懸絶シ來リ、三十年ヲ以テ日露戰爭ノ公債ヲ償却スルコトハ到底之ヲ期スベカラサルニ至レル也。

以上論スル所ニ由テ之ヲ觀レハ、我國ノ減債基金ハ¹⁸⁸⁰式減債基金ノ變形ノ如キモノナリシガ次第ニ¹⁸⁸⁰式減債基金ヲ離レ、年々一定額以上ノ償還ヲ爲ス基金ト化シ去レリ、然レトモ、今日

ニ於テモ、尙年々一般會計又ハ他ノ特別會計ヨリ資金ヲ繰入レ、強制的ニ一定額以上ノ公債償還ヲ行ヘル以上ハ依然減債基金ノ性質ヲ具ヘリト云ハサルベカラス。

第二 減債基金ハ理論上其目的ヲ達シ得ベキ乎

減債基金ハ前述フルカ如ク年々一般會計又ハ特別會計ヨリ資金ヲ繰入レテ基金トシ、之ニ由テ年々強制的ニ一定額以上ノ公債償還ヲ爲スモノ也、故ニ減債基金ノ目的ハ、公債ヲ減スルニ在リト云ハサルベカラス、若シ減債基金ノ働キガ公債ヲ増スニ至ラハ、其目的ハ明ニ達セラレサルモノト見サルベカラス。

減債基金ハ公債ヲ減スルコトヲ趣旨トスル以上ハ、廣クイヘハ其目的ハ財政上ニ存セリト云ハサルベカラス、之ヲ我國ノ減債基金法制定當時ノ事情ニ鑑ミルモ、日露戰爭ノ産メル公債殊ニ外債ヲ處理センカ爲メニ起リシコトハ寸毫モ疑ヲ容レサル所ナリトス、此ノ如ク減債基金ノ主ナル目的ハ財政上ニ在レトモ、此目的ヲ達スルカ爲メニハ、金融市場ト沒交渉タルコト能ハズ、勿論財政上ノ目的ガ主ナル以上ハ、金融市場ニ惡影響ヲ及ホスコトアルモ、之ヲ遂行スルニ躊躇スベカラサルモノアルベシト雖トモ、斯ノ如ク十分ニ成效ヲ收ムルコト能ハサルコトアルベシ、サレバ、減債基金制度ヲ完全ニ行ハントセハ、財政上金融上ニ之ヲ行フニ適シタル條件ヲ、具ヘザルベカラス。

財政上ヨリイヘハ、減債ノ目的ヲ達スベキ資力ヲ有セザルベカラス、即チ國家財政ニ於テ長キ

ニ亘リ、事實上、公債償還ニ充テ得ベキ餘裕ヲ存セサルベカラズ、若シ此餘裕ヲ存セサルトキハ、償還基金ヲ作ル爲ニ起債スルコトモ生スベク、其結果ハ公債ヲ減スルニアラズシテ之ヲ増スコトトナルベケレバナリ、然リ而シテ事實上公債償還ニ充テ得ベキ財政上ノ餘裕ハ歲入剩餘ニ外ナラズ、故ニ減債ノ目的ヲ達セントセハ、第一ニ歲入剩餘ノ存スルコトヲ條件トス、然ルニ歲入剩餘アルモ、他ニ重要ナル經費ノ生スルアリテ之カ支辨ニ充テサルベカラズトセバ、事實上公債償還ノ資源トナスコト能ハサルベシ、尤モ此場合ニ於テモ、其重要ナル經費ヲ支辨スルカ爲メニ他方ニ増稅ヲ爲スコトヲ得バ、敢テ妨クルコトナシ、故ニ減債ノ目的ヲ達セントセバ第二ニ、公債償還ヨリモ尙必要トセラルル經費ノ増シ來ラサルコトヲ條件トシ、若シ此ノ如キ經費ノ増シ來ルアラハ何時ニテモ増稅ヲ爲シ得ルコトヲ條件トス。

金融市場并ニ國民經濟上ヨリイヘハ、先ツ外債償還ノ場合ト内債償還ノ場合トヲ區別セサルベカラズ、外債ヲ償還セントセバ、自國民經濟ノ力能ク之ヲ堪ヘ得サルベカラズ、自國民經濟ノ力ガ外債償還ニ堪ヘ得ルニハ、少クトモ國際貿易カ順調ニシテ、正貨流入ノ趨勢ノ存スルコトヲ必要トス、若シ貿易カ逆調ニシテ正貨流出ノ傾アル際ニ、外債ノ償還ヲ行ハン乎、正貨ハ更ニ流出ノ度ヲ加ヘ、終ニハ中央銀行ノ兌換制度ヲ危フスルコトナキヲ保スベカラズ、事茲ニ至レハ外債償還ハ國民經濟ヲ破壊スルモノト云ハサルベカラズ、如何ニ財政上減債ヲ必要トスルモ、國民經濟ニ此ノ如キ打擊ヲ與フルコトハ何人モ許ササル所タルベシ、是カ故ニ外債ヲ償還スルニハ國際貿易ノ順調ニシテ正貨流入ノ趨勢アルコトヲ條件トセサルベカラズ。次ニ内債ヲ償還スルハ

内國金融ノ逼迫セル時ヲ以テ最好機トス、若シ内國金融ガ緩漫ニ過クルトキニ内債ヲ償還セン乎金融ノ緩漫ハ更ニ一段ヲ加フベク、銀行業者ハ必スヤ之ニ對シテ反對運動ヲ試ムベキ也、公債償還カ財政上ノ必要ニ出ツルトセバ、金融市場ニ多少ノ惡影響ヲ及ホスコトアルモ、亦之ヲ辭スベカラズ、然レトモ銀行家ノ反對運動アルニ拘ラズ、之ヲ敢テスルニハ、極テ鞏固ナル内閣ノ存在ヲ前提トセサルベカラズ、

之ヲ要スルニ減債基金制度ガ完全ニ行ハルルニハ財政上ニ於テハ歲入剩餘ノ常ニ存スルコト、公債償還ヨリモ更ニ重要ナル經費ノ増シ來ラサルコト、然ラサレバ何時ニテモ増稅ヲ爲シ得ルコトヲ條件トシ、國民經濟上ニ於テハ、外債ニ對スル場合ニハ國際貿易ノ順調ニシテ正貨流入ノ趨勢アルコトヲ條件トシ、内債ニ對スル場合ニハ國內金融ノ緩漫ニ過キサルコトヲ條件トス、

以上ノ條件カ十分ニ充タサルトキハ、減債基金ハ能ク其目的ヲ達シ得ベク、之ニ反シテ是等ノ條件ガ充サレサルトキハ、減債基金ハ其目的ヲ達スルコト能ハサル也、然ラハ則チ是等條件ハ容易ニ之ヲ充タシ得ベキモノナリヤ否ヤノ問題ヲ生ス

若シ夫レ一兩年ニ就タイヘハ、是等ノ條件ハ或ハ之ヲ充タスコト難シト云フベカラス、然レトモ、減債基金ハ長キニ亘リテ初テ效ヲ成スモノナレバ、是等條件モ亦長キニ亘リテ充サレサルベカラズ、然レトモ長キニ亘テ是等條件ヲ充タサントスルコトハ殆ト不可能ノコトニ屬ス、

財政上ノ條件ニ就テ之ヲ觀ルニ、長キニ亘リテ、歲入剩餘ノ存スルコトハ如何ナル國ノ財政ニ於テモ困難トスル所ナリ、蓋シ近時文明國ノ經費ハ膨脹シテ已マス、其膨脹シテ已マサル所以ハ元

費ノ増スニ因レルニアラズ、實ニ必要ニシテ缺クベカラサル經費ノ増スコト多キニ因レル也、若シ此ノ如キ必要ニシテ缺クベカラサル經費ノ増加シ來ルトキハ、曩ニ歲入剩餘アリシモノモ忽チニ消滅セサルベカラズ、是ニ由テ之ヲ觀レハ、長キニ亘テ歲入剩餘ノ存スルト云フ條件モ、公債償還ヨリモ尙必要視セラルル經費ノ増シ來ラサルヲ要スト云フ條件モ、容易ニ之ヲ充タシ得ズト云ハサルベカラズ、若シ從來ノ剩餘金ヲ常ニ減債ノ爲ニ用ヒ新ニ起レル重要經費ニ對シテハ増税ニヨリテ之ヲ支辨セン乎亦一策タルヲ失ハズト雖トモ、増税ハ常ニ爾カク容易ニ之ヲ斷行シ得ベキモノニアラズ、蓋シ増税ハ人民ノ利害休戚ニカカルコ極トテ大ナルモノニシテ、若シ其宜キヲ得サルトキハ人民ノ租税負擔ノ上ニ不公平ヲ生スルコト爲シトモ限ルベカラズ、サレハ、重要ナル經費ノ増スニ伴ヒテ、ソレ丈ケ宛増税ヲ進メテ行キ得ルモノト斷スベカラズ。

次ニ之ヲ金融上并ニ國民經濟上ノ條件ニ就テ觀ルニ、外國貿易ノ順調ニシ、テ正貨流出ノ趨勢ノ存スルコトハ、一定ノ時ニ於テハ之ヲ見ルコトアルベシト雖トモ長キニ亘リテハ容易ニ之ヲ見ルベカラズ、蓋シ外國貿易ハ種々ノ事情ニヨリテ變動シ、昨輸出超過ヲ見シモノ、今ハ輸入超過ニ苦ムカ如キコト屢起ルベケレハ也、次ニ內國金融ノ逼迫スルコトモ一兩年ノ間ニ於テハ之ヲ見ルコト少シトセサレトモ、長キニ亘リテ之ヲ見ルコトハ蓋シ稀有ノコトタルベシ。

以上論スルカ如クンハ、財政上經濟上ノ條件ハ、長キニ亘テ之ヲ充タスコト容易ナラズト云ハサルベカラズ、從テ減債基金ハ其性質上容易ニ其目的ヲ達シ得サルモノト斷セサルベカラズ、斯ノ如ク減債基金ハ其本質上容易ニ目的ヲ達スルコト能ハサルモノナルガ、而モ之ヲ廢セズ、

之ヲ固守シテ動カサルトキハ必スヤ他方ニ遁路ヲ見出ササルベカラサルニ至ルベキ也、而シテ其遁路ハ、左手ニ償却シ右手ニ起債スルノ方法ニ於テ之ヲ發見スベシ、蓋シ歲入剩餘ナクシテ、減債基金ニ充ツベキ資金ヲ得ントセバ勢ヒ起債ニ依ラサルベカラズ、又假令歲入剩餘アルモ他ニ重要ナル經費ノ新ニ生シ又ハ増シ來ラン乎、歲入剩餘ヲ以テ減債基金ノ資金ニ充テルトスルモ、重要ナル經費ヲ支辨スルニハ起債ニ依ラサルベカラズ、此ノ如クシテ一方ニ減債基金ニ依テ償還スルモ他方ニ公債ノ起サルルヲ防クコト能ハサル也。

一方ニ償還スルモ他方ニ起債スレハ、少シモ減債トハナラズ、從テ減債基金ノ目的ヲ達スルコト能ハサル也、併シ一方ニ還債シ他方ニ起債スル結果ハ尙之ニ止マラズ、其弊ハ更ニ甚シキモノアル也、他ナシ、之ニヨリテ國家ハ財政上ノ損失ヲ被ルニ至ルコト是也、何故ニ國家ガ財政上ノ損失ヲ被ルカト云フニ、ソレニハ三方面ヨリ觀察セサルベカラズ。

第一、左手ニ還債シ右手ニ起債スレハ、國家ハ之カ爲ニ費用ヲ投セサルベカラズ、銀行家ヲシテ其事務ヲ執ラシムレハ、之ニ相當ノ手数料ヲ與ヘサルベカラズ、若シ還債セサル代リニ起債ヲモ爲ササランニハ、斯カル經費ハ當然之ヲ節約シ得ベキモノタルベキ也。

第二、左手ニ還債シ右手ニ起債スレハ、國家ハ、發行價格ト償還價格トノ差ニテ損セサルベカラズ、國家ガ公債ヲ起サントセハ、如何ニ信用大ナルモノニアリテモ、額面價格ニテ發行スルコトハ殆ト困難ニシテ、發行價格ハ額面價格ヨリ以下ナルコトヲ常トス、蓋シ發行價格ハ既ニ發行セル公債ノ市場價格ヲ標準トスレハ也、然ルニ、國家ガ還債ヲ爲ストキハ、抽籤ニヨリ額面ヲ以

テ償還スルコトアリ得ベキ也、此場合ニ於テ國家ハ明ニ發行價格ト還債價格トノ差ニ於テ損ス也
國家カ實上償還ヲ行フ場合ニハ、其實上ハ市場價格ニ於テスルモノナルガ故ニ、實上價格ト發行
價格トハ互ニ相近クベキカ如シト雖トモ、二者カ全然同一ニ歸スルコトハ之ヲ期スベカラズ、蓋
シ國家ガ公債ヲ賣ラント云ヘハ、其瞬間ニ、其市場價格ヲ下落セシメ、公債ヲ買ハント云ヘハ、
其瞬間ニ、其市場價格ヲ騰貴セシムルニ至ルベケレハ也、サレハ、發行價格ハ實上價格ヨリモ低
キニ在ルヲ常トスト云ハサルベカラズ、果シテ然ラハ、國家ハ發行價格ト實上價格ニ於テ損スト
云ハサルベカラズ、此カル事情ノ下ニ於テ、國家ガ、起債ニ依テ實上償還ニ要スル丈ケノ資金ヲ
得ントセハ、公債ノ總額ハ一層大トナラサルベカラズ、是レ明ニ公債ヲ減スルニアラズシテ、公
債ヲ増スモノ也。

第三ニ、左手ニ還債シ右手ニ起債スレバ、國家ハ又利子ノ差ニ於テ損セサルベカラズ、蓋シ國
家ガ左手ニ還債シ右手ニ起債スルノ時ハ財政ノ遺線ヲ爲ス時ニシテ、國家ノ信用ヲ厚フスル所以
ニアラズ、故ニ新シク起サルベキ公債ニ對シテハ、高利ヲ支拂ハサルベカラサルニ至ラン、從テ
低利公債ヲ償還シテ、高利公債ヲ起スコトニ歸セサルベカラズ、國家ハ明白ニ此利子ノ差ニ於テ
損スベキ也、尤モ起サルベキ公債ト、還スベキ公債トハ、利子ニ於テ差違ナキヲ期スルコト之ア
ランモ、爾カスルニハ、起債ニ於テ發行價格ヲ一層下ケサルベカラサルベシ、何レニスルモ、國
家ノ損失タルニ於テ異ル所ナシ、只場合ニヨリテハ、低利公債ヲ發行シテ、高利公債ヲ發行スル
コトナキニアラズ、然レトモ此ノ如キハ市場ノ金利カ下落シ、公債ノ價格カ額面ヲ抜キタル時ニ

於テ、初テ之ヲ期スベキモノニシテ、所謂公債ノ借換ナルモノニ外ナラズ、從テ減債基金制度ノ結果ナリト云フヲ得ズ、否減債基金制度ヲ實行センカ爲ニ、左手ニ還債シ右手ニ起債スルトキニハ、財政ノ弱點ヲ表白スルカ爲メ、却テ此ノ如キ借換ヲシテ困難ナラシムベキ也、

以上論スルカ如ク、減債基金制度ヲ固守スルトキハ、終ニ左手ニ還債シ右手ニ起債スルノ政策ヲ採ラサルベカラサルニ至リ、國家ノ被ル損失ハ極テ大トナルベシ、爲政家ハ長ク此事實ニ盲目ナル能ハズ、加之、公債償還ヨリモ尙重要ナル經費ノ増シ來ラサルヲ要スト云フ條件モ充タサル場合ニハ、爲政者ハ其重要ナル經費ヲ支辨センガ爲メニ何等カノ工夫ヲ爲ササルベカラズ、然ルニ、他方ニ於テ何時ニテモ増稅ヲ爲シ得ルト云フ條件モ亦之ヲ充タシ難キカ故ニ、爲政家ハ終ニ減債基金繰入ヲ中止シテ、以テ重要ナル經費ヲ支辨セントスルニ至ルベシ、是ニ於テ減債基金ノ流用トナル也、減債基金ガ流用セラルトキハ、減債基金ハ當初ノ目的ヲ達スルコト能ハサルノミナラズ、其精神ニ於テ亡フ也、減債基金ノ減債基金タル所以、是ニ至テ空シト謂フベシ、論シテ是ニ至リ余輩ハ減債基金ハ其目的ヲ達シ得モノニアラズ却テ弊ヲ生スルモノナルコトヲ斷セサルヲ得サル也、

第三、減債基金ハ實際上其目的ヲ達セシ乎

余輩ハ前段ニ於テ減債基金ガ理論上其目的ヲ達シ得サルノミナラズ、却テ弊害ヲ伴ヒ來ルベキコトヲ論セシガ、今ヤ進テ實際ニ於テ、其目的ヲ達セシヤ否ヤノ問題ヲ解決セントス、是ニ於テ余輩ハ減債基金ノ歴史ヲ緝カサルベカラズ、

之ヲ歐洲ニ於ケル減債基金制度ノ歴史ニ徴スルニ、殆ト皆、減債ノ目的ヲ達セズ、甚シキハ増債ノ結果ヲ生セシヲ見ル、此事ハ余輩嘗テ法學會雜誌第一卷二號ニ於テ論セシヲ以テ茲ニ重テ説カズ、只我國ノ減債基金ニ至テハ少シク之ヲ吟味セサルベカラズ。

我國ノ減債基金制度ハ、明治三十九年法律第六號、國債整理基金特別會計法ニヨリテ設立セラレタルモノナルガ、其設立ノ動機ヲ知ルニハ、先ツ當時ノ公債ノ狀態ヲ明ニスルヲ要ス、今明治三十九年三月三十一日ニ於ケル未償公債ヲ見ルニ實ニ左ノ如シ、

(一) 日露戰爭前ノ公債

(1) 内債	四五四〇、九七五
舊公債	三、四一一、七四一
金祿公債	一、五八三、八四〇
海軍公債	八、九七九、一〇〇
整理公債	一、四一八、八五〇
軍事公債	一、五二六、三三〇
五分利公債	一、四三〇、七六五
(2) 外債	九、六六〇、〇〇〇
合計	五五三、三三〇、九七五

戰前後公債總計

(1) 内債	四五四〇、九七五
國庫債券	四、五八三、八四〇
煙草專賣法國庫債券	一、五八三、八四〇
(2) 外債	九、六六〇、〇〇〇
第一回六分利公債	九、六六〇、〇〇〇
第二回六分利公債	一、五八三、八四〇
第一回四分半利公債	一、五八三、八四〇
第二回四分半利公債	一、五八三、八四〇
第二回四分利公債	一、五八三、八四〇
合計	一、五八三、八四〇

此表ニ依テ之ヲ觀ルモ、減債基金制度創設ノ際ニ於テ、如何ニ日露戰爭ニ因ル公債ノ多キカ、又如何ニ外債ノ多キカヲ知ルベシ、是ヲ以テ減債基金ハ主トシテ日露戰爭ニ因ル公債就中外債ヲ眼中ニシテ償還計畫ヲ立テタル也、即チ日露戰役公債ニ對シテハ、年々一億一千万圓以上ヲ繰入レサルベカラズト定メタル也、然ルニ日露戰役ニ因ル公債ハ明治三十九年度ニ於テモ尙起サレタルモノアリ、又内債ヲ外債ニ借換ヘタルモノアリ、故ニ明治四十年度ノ初ニ於テ日露戰役ニ關係

セル公債ハ左ノ如ク巨額ニ達シタル也。

(1) 内債

元六〇五、九〇〇円

國庫債券

一、七四、四三〇、〇〇〇

煙草專賣法國庫債券

一、一四一、〇〇〇、〇〇〇

特別五分利公債

五〇〇、〇〇〇、〇〇〇

總計

三、三八六、四三〇、〇〇〇

(2) 外債

一、〇五、六三三、七九円

第一回六分利公債

九、七、四、一四一

第二回六分利公債

一、七、一、四、二二

第一回四分利公債

一、一、八、九、〇〇〇

第二回四分利公債

一、一、八、九、〇〇〇

第三回四分利公債

一、一、八、九、〇〇〇

第四回四分利公債

一、一、八、九、〇〇〇

第五回四分利公債

一、一、八、九、〇〇〇

第六回四分利公債

一、一、八、九、〇〇〇

第七回四分利公債

一、一、八、九、〇〇〇

第八回四分利公債

一、一、八、九、〇〇〇

第九回四分利公債

一、一、八、九、〇〇〇

第十回四分利公債

一、一、八、九、〇〇〇

第十一回四分利公債

一、一、八、九、〇〇〇

第十二回四分利公債

一、一、八、九、〇〇〇

第十三回四分利公債

一、一、八、九、〇〇〇

第十四回四分利公債

一、一、八、九、〇〇〇

第十五回四分利公債

一、一、八、九、〇〇〇

第十六回四分利公債

一、一、八、九、〇〇〇

第十七回四分利公債

一、一、八、九、〇〇〇

第十八回四分利公債

一、一、八、九、〇〇〇

第十九回四分利公債

一、一、八、九、〇〇〇

第二十回四分利公債

一、一、八、九、〇〇〇

此ノ如ク戰役公債ハ十六億餘圓ニ達シタレハ、其利子ハ無慮八千餘萬圓ニ上ラサルベカラズ、故ニ一億一千萬圓ヲ戰役公債ニ充ツルトスルモ、元金ノ償還ハ僅ニ二千萬圓位ニ過キサリシ也、然レトモ元金償還ノ進ムニ從ヒ之ニ支拂フベカリシ利子ヲモ元金償還ニ向クルコトヲ得ルカ故ニ利子拂ノ額ノ減スルニ反比例シテ償還額ハ増加シ來ルベシ、此クシテ三十年間ヲ以テ戰役公債ヲ償還セントシタル也、

減債基金ハ戰役公債ノ償還ヲ主眼トシタレトモ、其他ノ普通公債ヲ忘却セルニアラズ、只普通公債ノ償還額ニ就テハ法律上ノ強制ナカリシノミ、是ニ於テ明治三十九年度ニハ一億五千百十八萬三千五百拾四圓ヲ一般會計ヨリ減債基金ニ繰入レ約三千萬圓ヲ戰役公債ノ償還ニ、約千五百萬圓ヲ普通公債ノ償還ニ充テタリ、

減債基金ハ此ノ如ク約四千五百萬圓ノ元金償還ヲ以テ初マリシガ、明治四十一年日露戰爭後好景氣ノ反動時期ニ入り、公債ハ激落シ商店ハ破産シ銀行ノ支拂停止ヲ爲スモノスラ發生セシカハ、銀行業者ハ相集マリ年々六千萬圓以上ノ公債ヲ償還スベシトノ議ヲ決シ之ヲ政府ニ建議スルニ至レリ、政府ハ其議ヲ容レ年々五千萬圓以上ヲ償還スベキコトヲ定メ、爾來以テ法トセリ、此クシテ

明治四十二年度ニハ五千五百萬圓ヲ償還シ、明治四十三年度ニハ六千五百六萬四千三百六拾四圓ヲ償還シ明治四十四年度ヨリ大正三年度ニ至ル迄ハ各五千萬圓ヲ償還セリ、而シテ五千萬圓還債主義ノ定マリタル後ニケ年間ハ専ラ内國公債ノ償還ヲ事トセシガ、明治四十五年度ヨリ、五千萬圓中、壹千萬圓ヲ割キテ外債ノ償還ヲモ爲シタリ、大正四年度ニ至リ、減債基金ニ繰入レテ還債ニ充ツベキ五千萬圓ノ中二千萬圓ヲ鐵道資金ニ融通シ、三千萬圓ヲ還債ニ充ツルコトトシ、其三千萬圓ヲ以テ外債ヲ償還セリ、大正五年度ニ至テハ、其豫算討議ノ際ニ還債額ヲ五千萬圓ニ復舊セントノ論起リ、貴族院ニ於テ最モ盛ナリシカバ、政府ハ之ニ譲リ、減債基金ニ繰入レテ還債ニ充ツベキ三千萬圓ハ之ヲ改メサリシモ、別ニ追加豫算トシテ二千萬圓ヲ計上シ、内債ヲ募リ外債ヲ償還スルコトトシ、實際上、五千萬圓ノ外債ヲ償還スルニ至レリ。

此ノ如ク減債基金ハ當初ニ於テ四千五百萬圓ノ還債ヲ爲シ、明治四十二年以來、殆ト年々五千萬圓以上ノ還債ヲ爲シ來リシカ故ニ一見減債ノ目的ヲ達シタルガ如クニ考ヘラルルガ、實際ハ決シテ然ラズ、却テ公債ノ増加セルヲ見ル也。

今明治三十九年度ヨリ大正五年度ニ至ル迄ニ、各年度首ニ於ケル公債額ヲ見ルニ實ニ左ノ如シ

明治三十九年	一、八七〇、三六、二七五	明治四十五年	二、五五五、六五、四七三
明治四十一年	二、一三六、七〇、〇八一	大正二年	二、四四三、九三、〇四五
明治四十二年	二、三三六、四三、四三二	大正三年	二、四四三、〇〇、〇四五
明治四十三年	二、三八〇、〇六、八三三	大正四年	二、四七〇、〇八、一四二
明治四十四年	二、六二二、八〇、三三三	大正五年	二、四九二、二四、四二七
	二、六二二、八〇、三三三		

此表ニ依テ之ヲ觀ルトキハ、減債基金制度ヲ創メタル年度ノ首ニ於テ、公債額十八億七千萬餘

圓ナリシモノガ、十年ノ後ニ至リ二十四億八千九百萬餘圓トナリ、六億餘圓ノ増加トナレリ、而シテ年々五千萬圓以上ノ償還ヲ爲シタリシニ拘ラズ、公債ハ却テ初メノ五年間ニ於テ累増シ、後ノ五年間ニ於テ増減、度ナキヲ見ル、何レニセヨ少シモ減債ノ目的ヲ達セス、却テ増債ノ結果ヲ生シタルヲ知ル也。

何故ニ減債ノ目的ヲ達セス却テ増債ノ結果ヲ生シタルカト云フニ、ソハ一方ニ還債シツ、アルモ他方ニ起債シタルカ故也、一方ニ還債シツ、モ、他方ニ起債スル所以ハ、公債償還ニ劣ラサル重要ナル經費ガ新ニ出テ來リシガ爲メ也、

今此邊ノ消息ヲ明ニスルニ先テ、少シク明治四十年以來頻々ニ行ハレシ借換ニ就テ一言セントス、蓋シ戰時公債ハ短期ナリシモノ又ハ高利ニ過キシモノアリシカ故ニ其借換ヲ爲スコトハ早晚免レ得サル運命ニシテ而モ亦財政整理ノ上必要ナリシ也、故ニ借換ニヨル波瀾ハ減債基金制ヨリ離シテ觀察セサルベカラズ。

借換ハ明治四十年三月ニ初マル、第一回并ニ第二回ノ六分利英貨公債二億千四百七十八萬六千圓ヲ償還スルカ爲ニ、五分利英貨公債二億二千四百五十四萬九千圓ヲ募集シ、公債額面約千萬圓ノ増加ヲ來セリ、

日露戰時ニ於テ、國內ニ起シタル國庫債券ハ五回ニ亘リ其額四億八千萬圓ニ達セシガ其第四回第五回ノ六分利國庫債券一億八千萬圓ニ關シテハ、既ニ明治三十八年ノ末、第二回四分利英貨公債二億四千四百七十五萬五千圓ヲ發行シテ、借換ヲ了セリキ、第一回ヨリ第三回ノ國庫債券(五分利)三億圓并ニ煙草專賣法國國庫債券千五百萬圓ニ關シテハ內國ニ於テ借換ヲ爲セリ、明治四十一年三月ニ起債セル國庫債券整理公債(所謂五分利乙號公債)三一、〇〇一、一五〇圓、明治四十三年二月第一回四分利公債規程ニ依テ起債セルモノ、一七五、六五六、九五〇圓、同三月第二回四分利公債規程ニ依テ起債セルモノ、九九、九九九、五〇〇圓、合計三〇五、六五七、六〇〇圓是也、此借換ニ於テモ、公債額面、約千萬圓ヲ増スコトナレリ、

明治四十三年三月ニハ、四分利付佛貨公債一七四、一五〇、〇〇〇圓同五月ニハ第三回四分利英貨公債一〇七、三九三、〇〇〇圓ヲ發行シ、英佛ニ流出セシ我公債ノ償還ニ充テ、併セテ軍事公債整理公債五分利公債ノ償還ニ充テリ、

以上ハ皆借換ノ爲ニ公債ヲ發行セシモノニシテ其額ハ實ニ八億千百七十六萬七千六百圓ニ上レリ、是等ノ公債ニ就テハ借換ノ爲メ多少其額面ヲ増スニ至リシモ、他方ニハ利子ヲ減セシカ故ニ未タ以テ、我財政ニ損失ヲ來セシト見ルベカラサル也。

然ルニ是等借換ノ爲メニセシ外ニ、公債ヲ起セシモノ少カラズ、其一ハ恩賜公債ニシテ朝鮮併合ノ結果トシテ生シタルモノ也、其額三千萬圓也、其二ハ朝鮮事業費公債ニシテ其額亦三千萬圓也、其三ハ鐵道ニ關スル公債也、明治三十九年鐵道買上ヲ實行スルヤ、之ニ續テ鐵道買上公債(所謂甲號五分利公債)四七六、三一八、七五〇圓ヲ發行シ、舊鐵道會社々債六三、四八四、九五〇圓ヲ引受ク、合計五三九、八〇三、七〇〇圓ノ公債ヲ負フコトナレリ、其後鐵道ノ敷設改良ニ資金ヲ要セシモ、偶々非募債主義ヲ採用セラレ公債ノ形ニ於テ資金ヲ得ルコト能ハサルニ至リシヲ以テ、預金部ノ借入ニヨリ或ハ大藏省證券ノ發行ニヨリ、一時的融通ノ道ヲ求メタリキ、然ルニ是等ノ一時的融通モ巨額ニ上リシカバ、大正二年四月五分利付佛貨國庫債券七七、四〇〇、〇〇〇圓并ニ五分利付英貨鐵道債券二九、二八九、〇〇〇圓合計一〇六、六八九、〇〇〇圓ヲ發行シテ、國內ノ一時的融通ヲ償還セリ、

此外、新ニ起サレタル公債ニハ祿高整理公債、沖繩縣諸祿公債、舊韓國事業公債、救恤公債、製鹽整理公債、禁獵公債等アレトモ、皆其額ハ比較的小ナレバ、深ク論スルヲ要セズ、

以上論スル所ニ依テ之ヲ觀レハ、減債基金カ還債ヲ行フニ拘ラズ、公債ノ額却テ増加セシハ、朝鮮ニ關スル公債、鐵道ニ關スル公債ガ起サレタルニ職由スト云ハサルベカラズ、然ルニ朝鮮ノ合併、鐵道買上ノ如キハ、我國發展ノ上ニ必要ナルコトニシテ、減債ノ急ナルヨリモ更ニ急ナル

斷セサルベカラズ、

我國ノ減債基金制度ハ此ノ如ク減債ノ目的ヲ達セザリシガ、其弊ハ之ニ止マラズ、一方ニ還債シ他方ニ起債シタルカ爲メニ、國家ハ財政上少カラサル損失ヲ被レル也、國家ガ償還シタル公債ハ多クハ五分利付ノ公債ナリ、然ルニ、國家ガ他方ニ起シタル公債ハ概テ五分以上ノ利廻トナレルモノナリ、殊ニ短期公債ニ於テ然リトス、大藏省證券一時借入金等ノ短期公債ハ金融市場ノ狀況ニヨリテ、其利子ヲ變スルガ故ニ、時ニハ五分利以下ニ落ツルコトナキニアラサルベシト雖トモ、普通ノ場合ニ於テハ、長期公債ノ利子ヨリモ高キ也、英貨鐵道證券ニ就テ之ヲ見ルモ、五厘七厘五毛ノ利率ヲ以テ割引セラレタル也、以テ其一斑ヲ知ルベシ、此ノ如クシテ我國ノ財政ハ減債基金ノ爲ニ少カラサル損失ヲ被リタル也、

之ヲ要スルニ我國ノ實際ノ歴史ニ徴スルモ、減債基金制ハ啻ニ其目的ヲ達セサリシノミナラズ、國家財政ニ損失ヲ齎ラセリト云ハサルベカラズ。

第四 減債基金制ハ廢止スベシ

之ヲ減債基金ノ本質ニ稽ヘ、理論的ニ推論スレハ、減債基金ハ到底其目的ヲ達シ得サルノミナラス、却テ財政上ノ損失ヲ來スモノナルコトヲ知り、之ヲ我國減債基金ノ歴史ニ考ヘ、實際ニ於ケル結果ヨリ觀察スレハ、減債基金ハ其目的ヲ達セサリシノミナラズ。却テ財政上ニ損失ヲ來セシコトヲ知ル也、果シテ然ラハ、減債基金ハ之ヲ廢スルヨリ外アラサル也、

余輩ハ減債基金設定ノ當時ヨリ、減債基金制度ノ弊害ヲ痛論シ、決シテ新ニ設クベキモノニア
ラサルコトヲ力説セリ、新ニ設クベキモノニアラズト云フ意見ハ、既ニ設ケラレタル後ニ於テハ
之ヲ廢スベシトノ意見トナル也、蓋シ既ニ設ケラレタル後ニ至テ減債基金ノ短所ガ長所ニ變スル
コトナケレハ也、是カ故ニ余輩ハ大隈内閣ガ減債基金ニ手ヲ着ケ之カ流用ヲ初ムルニ當テヤ、減
債基金制打破ノ第一歩ナリトシテ之ヲ歡迎セシ也、然ルニ貴族院ニ於テ、所謂減債基金還元論ノ
聲高マルヤ、大隈内閣ハ之ヲ抑フルノ權威ナク、終ニ之ト妥協スルノ已ムナキニ至レリ、寺内内
閣ノ最モ有力者中ニハ其當時還元論ヲ提ケテ大隈内閣ニ肉薄セシ人アレハ、寺内内閣ハ此還元論
ヲ實現セントシ大隈内閣ガ減債基金ニ繰入ルベキ償還額ヲ三千萬圓トシ二千萬圓ハ鐵道資金トシ
テ融通スベキモノトセシヲ復舊シ、償還額ハ五千萬圓トシ、鐵道資金ハ公債ニ依ルコトトセリ、
是レ實ニ減債基金打破ノ趨勢ニ一逆轉ヲ試ムルモノ也、進歩ニアラズシテ退歩也、此政策ハ明ニ
一方ニ起債シ他方ニ還債スルコトヲ標榜スルモノト云ハサルベカラズ、一方ニ起債シ他方ニ還債
スルコトハ國庫ヲ損スルコトニ歸ス、思フニ此政策ガ實行セラルルニ及ヘハ、政府ハ必スヤ四分
半利付英貨公債ヲ償還シ、我國内ニ於テ鐵道公債ヲ募ラン、而シテ其鐵道公債ノ利子ハ五朱ヲ下
ラサルベキヤ必セリ、是ニ至テ、國家ハ明々白々ニ損スル也、國家ヲ損セシムル政策ヲ以テ最モ
當ヲ得タリトナスハ余輩ノ殆ト解スルコト能ハサル所也、

寺内内閣ハ此ノ如ク減債基金復舊策ヲ以テ出發ス、故ニ余輩ハ一應寺内内閣ガ、減債基金制維
持論者ナリト推定セサルヲ得ズ、然ルニ勝田藏相ニ海軍擴張費ハ如何ニ補填スベキカト問ヘハ、

* 法學會雜誌第一卷第一號第二號

** 經濟論叢第一卷第一號

藏相ハ後年度ニ於テハ、減債基金ヲ流用セント答ヘシト云フ、是レ實ニ心得難キ論也、若シ減債基金ヲ維持スルナラハ、海軍擴張費ノ前ニモ屈スベカラサル也、海軍擴張費ノ前ニ屈スベクンハ、鐵道資金ノ前ニ屈スルモ亦不可ナキカ如シ、何カ故ニ減債基金ハ鐵道資金ニ流用スルコトヲ得ストシ海軍擴張費ニ流用スルコトヲ得トスル乎、余輩得テ其何ノ意タルカヲ解スル能ハサル也、或ハ曰ハン、鐵道資金ハ生産的經費也、當ニ公債ニヨリテ支辨スベキ也、海軍擴張費ハ、不生産的經費也、宜シク租税ニヨリテ支辨スベシ、減債基金ニ繰入ルベキ資金ハ租税ニ依ルベキモノナレハ、海軍擴張費ニハ流用シ得ルモ、鐵道資金ニハ流用シ得ズト、余輩ノ見ル所ヲ以テスレハ、ソハ誤レリ、鐵道資金ハ、生産的經費ナルモ、租税ニ依テ支辨シ得ズト云フ理由アルナシ、故ニ減債基金ニ繰入ルベキ資金ヲ鐵道特別會計ニ融通スルモ毫モ妨ケアルベカラズ、其理ハ嘗テ本誌*ニ論シタルコトアレハ茲ニ重テ説カズ、然レトモ、論點ハ減債基金ヲ鐵道資金ニ流用スルガ是ナリヤ非ナリヤニ存セズ、又之ヲ海軍擴張費ニ流用スルガ是ナリヤ否ヤニモ存セズ、論點ハ、減債基金ソレ自體ガ流用シ得ベキヤ否ヤニ存ス、寺内内閣ハ減債基金ヲ海軍擴張費ニ流用スルコトヲ許サントス、果シテ然ラハ、減債基金ソレ自體ハ流用シ得ベキモノトナセル也、然ルニ、減債基金ソレ自體ガ流用セラルトセハ、減債基金ハ其精神ニ於テ亡フ也、サレハ減債基金ノ流用ヲ認ムル人ハ、減債基金ヲ維持スル論者ニアラズシテ、之ヲ打破セントスルモノト謂ハサルベカラズ、是ニ於テ余輩ハ寺内内閣ヲ以テ陽ニ減債基金ヲ擁護シ陰ニ之ヲ葬ラントスルモノナリト評セントス、既ニ陰ニ之ヲ葬ラントストセハ、寺内内閣ノ見ル所ハ余輩ノ見ル所ト懸絶スル所ナキ也、只本年

度ノ豫算ニ於テノミ見解ヲ異ニスト云ハンノミ、

貴族院議員豊川良平氏亦減債基金ノ廢止ヲ唱フ、然ルニ其論スル所ヲ見ルニ減債基金制ハ昨是ニシテ今非ナリト云フ也、何故ニ昨ハ是ナリシヤト云フニ、巨額ノ還債ヲ爲シテ内國ノ金融ヲ調節シタリシカ爲メ也、何故ニ今ハ非ナリヤト云フニ、内外ノ金融界潤澤トナリ復タ往時ノ如ク内地ニ於テ毎年一定ノ公債元金ヲ償還スルノ必要ナシ、否此上毎年償還セラレテハ、金融界ハ大ニ迷惑スベケレハナリト氏ノ説ハ減債基金ヲ以テ金融調節ノ目的ヲ有スルモノトナス也、然リ、金融調節ト云フ點ヨリ見レハ、減債基金ガ過去ニ於テ必要ナリシモ現今ニ於テ必要ナキ所以ハ之ヲ解シ得ベシ、然レトモ此理ヲ以テ推セハ、減債基金ハ將來ニ於テ必要ナシト云フコト能ハズ、蓋シ將來ニ於テ金融調節ヲ必要トスベキ時必スヤ到來スベケレハ也、思フニ、減債基金ガ金融市場ト交渉ノアルコトハ疑ヲ容レズ、然レトモ減債基金ノ存廢ヲ決スルニ當リ單ニ金融調節ノ見地ノミヨリスルハ、當ヲ得タルモノニアラズ、減債基金ノ死活問題ハ、其由テ以テ産マレタル使命即チ財政上ノ目的ニ觸レサレバ、之ヲ解決スルコト能ハズ、余輩ハ減債基金ノ産マレタル所以ノ理ニ鑑ミ、ソガ、自己ノ使命ヲ果タシ得サルヲ見テ、之ニ引導ヲ渡サントスル也、同シク、減債基金廢止論ト云フモ、余輩ノ見ル所ハ豊川氏ノ見ル所ト大ニ異ル所アル也。

論シテ茲ニ至リ、余輩ハ減債基金ヲ維持セントスノ説ヲ一瞥セサルベカラズ。

學者或ハ自由償還制度カ動モスレバ、減債ヲ忘レ政務ノ膨脹ヲ助長スルノ結果ヲ生スル虞アルヲ非ナリトシ、減債基金制ヲ維持シ、法律ニヨリテ還債ヲ強制シ爲政治家ヲシテ財政ノ緊縮ヲ計ラ

シメサルベカラズト論ス、正々堂々ノ論ナリ、然レトモ、之ヲ實行論トスレハ、余輩俄ニ之ニ贊同スルコト能ハサル也、法律ノ強制償還タルヤ甚タヨシ、法律ヲ以テ強制セントセバ、事實ニ於テ強制シ得サルベカラズ、事實ニ於テ強制シ得サルコトヲ法律ニヨリテ強制スルモ、到底實行スルコト能ハサル也、然ラハ公債ノ償還ハ事實ニ於テ強制シ得ベキ乎否カラ明ニセサルベカラズ、事實上公債ヲ償還セントセバ、歳入剩餘ニ待タサルベカラズ、然ルニ歳入剩餘ハ政務ノ膨脹ヲ抑ヘ、財政ノ緊縮ヲ計リテモ尙之ヲ生セサルコトアリ、又假令一度歳入剩餘生スルモ、次年度ニハ非常ニ重要ナル政務ガ起リ、如何ナルコトアルモ其經費ヲ支辨セサルベカラサルニ至ルコトアルベシ、此經費ノ支辨ニ對シ増稅ヲ爲スヲ得バ問題ナキモ、増稅ハ何時ニテモ容易ニ爲シ得ベシト限ラズ、事茲ニ至レハ、如何ニ法律ノ強制アルモ、事實上還債ヲ行フニ由ナキ也、若シ事實上還債シ得サルモ、尙法律ニヨリテ強制セントスルナラハ、還債ヲ爲スカ爲ニ起債ヲナスコトヲ強制スルモノト云ハサルベカラズ、是レ欺瞞ノ強制也、財政紊亂ノ強制也、天下豈ニ斯カル非理ノ強制アラシヤ、故ニ論者ガ法律上ニ還債ヲ強制スルハ是ナルヲ主張セントスルナラハ、事實上ニ強制シ得ルコトヲ證明セサルベカラズ、事實上ニ強制シ得ルコトヲ論證セントセハ減債基金ノ完全ニ行ハルル條件ガ、何時ニテモ十分ニ充タサレ得ルコトヲ證明セサルベカラズ、換言セハ、財政上ニハ常ニ剩餘ノ存シ得ルコト、還債ヨリモ重要視セラルル經費ノ新ニ起リ又ハ増シ來ラサルカ若クハ何時ニテモ増稅ヲ爲シ得ルコトヲ立證セサルベカラサル也、然ルニ斯ノ如キ證明ハ到底容易ニ爲シ得ベキモノニアラサル也。

論者ハ法ノ強制ヲ神聖化セントス、然レトモ無キ袖ハ振ハレサル也、若シ無キ袖ヲ振ハシメントセハ法ハ其權威ヲ失ハン也、勿論、法ハ爲政家ヲ強制スルモノナレトモ、其法ハ爲政家一依テ改廢セラルコトアルヲ忘ルベカラズ、現ニ大隈内閣ハ減債基金法ニ強制セラレズシテ却テ減債基金法ヲ改正セシニアラズヤ、又以テ法ノ強制ガ減債基金ノ行ハルル唯一ノ保障ニアラサル所以ヲ知ルベキ也、

學者或ハ曰ク從來我國ノ減債基金制度ガ其目的ヲ達セサリシハ、鐵道ニ關スル經費ガ餘リニ膨脹シタル爲ニ外ナラス故ニ減債基金制度ヲ遂行スル爲ニ鐵道費ニ大斧鉞ヲ加ヘサルベカラズト、又一見解タルヲ失ハズ、然レトモ鐵道費ヲ削減シタレバトテ、減債基金維持ノ保障ト爲スコト能ハズ、鐵道費ニ代テ減債基金ノ遂行ヲ妨害スルモノ現ハルベケレハ也、海軍擴張費ノ如キハ現ニ其一例ナラズヤ、是カ故ニ、減債基金制ヲ維持セントセバ、公債償還ヨリモ重要ト視ラルベキ經費ノ新ニ生シ又ハ増シ來ルコトナシト云フコトヲ證明セサルベカラズ、然ルニ此ノ如キ證明ハ殆ト之ヲ望ムベカラサル也。

次ニ鐵道費ガ公債償還ヨリモ重要ニアラズト云フ論ハ一應尤モナレトモ、全般ノ眞理ヲ包含セラルモノニアラズ、政黨ノ勢力擴張ノ爲ニ重要ナラサル地方ノ鐵道敷設ヲ急クカ如キハ、之ヲ許スベカラズ、斯ノ如キ場合ニハ、鐵道費ハ公債償還ヨリモ急ナルモノニアラズト云フコトヲ得ン、然レトモ之ヲ以テ一般ヲ推スベカラズ、元來鐵道網ヲ完成スルコトハ經濟上政治上軍事上、國家生活ニ於テ極テ重要ナルコトニ屬ス鐵道網カ完成セサレハ一國社會ハ半身不隨タルヲ免レズシテ、國勢ノ進轉ヲ期スルコト能ハサレバ也、其之ヲ敷設スル地方ヨリ考フレハ國家全般ニ亘レル事業

ニアラサルカ如ク見ユ、併シ之ヲ鐵道網ノ完成ヨリ考察スレバ、決シテ部分的事業ニアラズ、サレバ、鐵道ノ敷設改良ハ部分的ニシテ還債ハ一般のナレハ前者ヲ捨テテ後者ヲ探ラサベカラズト云フ論ノ如キハ、其當ヲ得タルモノト云フベカラザル也、之ヲ我國ノ實際ニ就テ見ルニ、鐵道網ハ未タ十分ニ完成セラレサル也、幹線ニシテ尙成ラサルモノ少シトセサルニアラズヤ、此時ニ當リテ鐵道敷設ハ急ヲ要セズト説ク、余輩其可ナル所以ヲ知ラサル也、論者ハ頻リニ過去ニ於テ鐵道費カ減債基金制度ノ遂行ヲ阻碍セリト論ス、蓋シ當レリ、然レトモ、之ヲ以テ誤レリトスベカラズ、鐵道カ今日ノ如ク延ヒ來リタルハ少クトモ過去ニ於テ財政上ノ困難アルニモ拘ラス鐵道敷設ノ中止セラレサリシカ爲也、若シ減債基金制度ノ遂行ノ爲ニ鐵道敷設費ニ大削減ヲ加ヘタリシナラバ、今日彼カ如キ鐵道ノ擴張ヲ見ルニ至ラサリシヤモ知ルベカラズ、余輩ハ、一方ニ鐵道費支辨ノ爲ニ起債シ、他方ニ公債ノ償還ヲ爲シ來リシヲ以テ遺憾トスルモノナレトモ、公債ノ償還ヲ爲サンカ爲ニ鐵道ノ敷設ヲ中止スルト云フ政策ノ探ラレサリシヲ寧ロ國家ノ爲ニ慶セントスルモノ也。論者又或ハ外債ノ多キヲ憂ヘ之ヲ償還スルカ爲メニ減債基金ヲ維持セサルベカラズト説クモノアリ、然レトモ外債償還ノ爲ニ減債基金ヲ維持セントセバ、前ニ述ヘタル財政上ノ條件ヲ充タス外ニ國民經濟上ノ條件ヲ充タササルベカラズ、換言スレバ、長キニ亘リテ國際貿易ガ順調ニシテ正貨流入ノ趨勢カ存セサルヘカラズ、然ラサレハ事實上外債償還ヲ續クルコト能ハサルベケレハナリ、然ルニ此ノ如キ條件ヲ充タスコトモ容易ニ望ムベカラザル也。

以上論スル所ニ依テ之ヲ觀レハ減債基金制度維持説ハ十分ノ根據ヲ有セズト云ハサルベカラズ、廢止スルニ強キ理由アリ、維持スルニ根據乏シ、是レ余ノ茲ニ減債基金廢止ヲ提唱スル所以也。

結 論

減債基金ハ其性質ヨリ稽フルモ、到底實行シ得サルモノ也。又之ヲ歴史ヨリ觀察スルモ其當初ノ目的ヲ達シ居ラサル也、理論上ヨリ云フモ、實際上ヨリ云フモ、減債基金ハ、之ヲ維持スルノ理由ナキ也、是カ故ニ減債基金ハ之ヲ廢セサルベカラサル也。

我國ノ減債基金ハ十年繼續シ來レルモ、他方ヨリ見レハ廢滅ノ道程ニ進ミツツアル也、大隈内閣ガ貳千萬圓ヲ割キテ、鐵道資金ニ流用シタルハ其第一步也、寺内内閣カ將來ニ於テ海軍擴張費支辨ノ爲ニ之ヲ流用セントスルハ、其第二步タラスンハアラズ、此ノ如クシテ、國家財政ノ進歩ハ自然ニ此制度ヲ葬リ去ラスンハ止マサラントス、既ニ此ノ如キ運命ヲ有セルモノトセバ、今日ニ於テ之ヲ葬ル、敢テ早キニ失スト云フベカラサル也、

然ラハ則チ之ヲ廢止スル如何、國債整理基金特別會計法ヲ廢スルハ最モ捷徑也、然レトモ此ノ如キ突撃ヲ試ミサルモ、減債基金制度ハ之ヲ破ルコトヲ得ベキ也、ソハ他ナラズ、減債基金法ヲ改正シ、重要ノ經費ヲ支辨セサルベカラサル場合ニハ減債基金ニ繰入ルベキモノヲ之ニ流用シ公債償還ハ其範圍ニ於テ之ヲ中止ストノ條項ヲ加フルコト是也、或ハ起債ノ必要ヲ生スル場合ニハ、其範圍ニ於テ公債ノ償還額ヲ以テ之ニ應スベシト定ムルモ亦可也、此ノ如クンハ、名ハ減債基金タルモ、其實ハ自由償還制度タル也、世ニハ告朔ノ餼羊ヲ撤セサラントスルモノアリ、余輩ハ斯カル論者ニ敬意ヲ表シ自由償還制度ノ實體ニ、減債基金制度ノ衣ヲ裝ハシムルニ於テ異議ヲ挿ヘサラントス、余輩ハ名ヲ取ルヨリモ實ヲ取ルノ優レルヲ信スルモノ也、